

皮膚科検査の必要性和重要性

2010年の増刊号として『皮膚科検査法の実際』が発刊されてから14年という歳月を経て、『皮膚科検査法の基本マニュアル』を今回の増刊号のテーマに選んだ。コンセプトは日常診療に“すぐに役立つ　すぐ役立つ”ものであり、各検査の要点をコンパクトにまとめている。皮膚科学を学び始めた若い医師はもちろん、最新の情報を得たい諸先生方にも勉強になる参考書である。2010年の増刊号に比して、とくに遺伝学的検査・細胞解析の進歩が目覚ましく、14年前と異なりもっとも多くのページを割いて解説している。これらの検査は最終診断や分類に欠かせない。

数多くの医療事故案件をみていると、トラブルに至る前になぜこの検査をしなかったのか、それを行うことで臨床像の変化や検査データの異常に気づけていたはずだ。そうすれば、この医療事故を未然に防止できた可能性が高い、などと考えさせられることがある。日常診療が忙しすぎて余裕がなかった、必要性を感じていなかったなどの理由があげられよう。以下にいくつかの案件を提示する。

外陰部に生じる乳房外 Paget 病は、頻度は高いとはいえないものの、ときに日常診療で遭遇する可能性がある。当初は湿疹と思いきステロイド外用薬を処方し、掻痒感は改善しても皮疹は変化せず徐々に進行する。プライベートパーツであり、大して変化しないので薬のみの処方希望が多い。初診時に臨床写真を撮っておくと、その後の見直しに有用である。皮疹が治らず、白斑、びらんや腫瘤などがみられるようになるのであれば、初診時と比較して上級施設に紹介できる。

悪性黒色腫で初診時にダーモスコピー検査を施行せず、色素性母斑との診断でレーザー治療を行った結果、再発を繰り返した症例もある。通常と異なる治療経過に違和感を抱いたら、1~2回までの再発の時点で上級施設やダーモスコピーの得意なクリニックに紹介すべきである。最近ではダーモスコピーは皮膚腫瘍以外にも応用されているが、良性腫瘍として放置してよいのか、悪性腫瘍を疑い紹介すべきか考えるのに役立つ。最近では多くの皮膚科に普及し、日常診療で使われている。それでみつかった微細な異常所見をきっかけに紹介される症例も多く、早期発見や早期治療に有用である。さらに使い方のコツを学んで日常診療に役立てていただきたい。

ほかにも、帯状疱疹後神経痛の強い症例で、鎮痛薬を長期に連用して重度の薬剤性肝障害を呈したケースがある。経過中に一度でも血液検査を施行していれば、肝障害に気づくはずである。脂肪腫の手術であれば、部位や被膜の厚さによっては一人でオペをするには難易度が高い。術野が狭く、誤って動脈や神経を損傷する例がある。術前に体表エコー検査を含む画像検査をすれば、脂肪腫の状況が把握できる。時間をかけて慎重に従来より術野を広げたり、上級施設に紹介してもよい。近い将来、なぜ経過中にこの増刊号で取り上げたような新しい検査法を施行していないのか、問われる案件が出てくるかもしれない。

従来の検査法を見直し、新しい検査法を少しずつ日常診療に応用していくと、臨床診断が的確かつ信頼性の高いものになる。大いにこの増刊号を活用していただきたい。

向 井 秀 樹